

万葉研究史における三人

久松潜一

まづはじめに三人を挙げるこの意味についてのべたい、私は歴史の展開を類型的に把握しようとする時、三を挙げるのが、把握しやすいと思つてゐる。一という数は絶対価値をとくには適當であるが歴史の展開は説明されな
い。二という数は類型や様式をとくには都合がよいが、歴史の展開をとくには十分でない。人麿と赤人といひ、近松と西鶴というように様式を比較することは出来るが、二では展開の類型をとくに至らない。三という数は弁証法的に二のものを止揚して第三のものを生出してゆく場合に用ゐられるが私はそれとともに歴史的展開を類型的にもしくは様式的に把握するのに都合がよいと思つてゐる。時代区分でも古代、中世、近世とあげるとほど展開のめどがつく。三という数はその点で私なりの思考に都合がよいのである。

私は前に和歌史上の三人という題で話したことがあり、歌論史上の三人ということで話したこともある。万葉研究史上の三人という題でもかつて話したことがある。今日はそれを修正する意味でもう一度この題をかゝげたのである。以前には万葉研究史の三人として仙覚と契沖と鹿持雅澄とを挙げたことがある。私は万葉研究の史的展開を類型的に扱う場合、中世に於ける仙覚、近世に於ける契沖という点では今も変らないが、近代から一人をとりあげる時、雅澄では必ずしも適當ではない。そうして近代の万葉研究家から一人をとりあげる時、まだ確定出来ないことではあるが、近代万葉研究の最初の人として木村正辞博士を挙げて見たい。

この三人を年代的に見ると仙覚は千二百七十三年（文永十年）七十一歳頃に歿した今より六百九十四年前である。

契沖は千七百一年（元禄十四年一月）に六十一才で歿している、今より二百六十六年前である。木村正辞博士は千八百二十七年（文政十年）に生れ、千九百十三年（大正二年四月）八十七才で世を去っている、今より五十年前である。万葉研究一千年（古点の行われた天曆五年より数えて）の行事が行われたのは先年であったが、その間にこの三人を位置づけて見ると興味深いものがある。

二

仙覚が万葉研究に於ける画期的意義については何人も疑わない。万葉集の本文改訂による仙覚本の制定、百五十二首の新点をつけたことよって全歌に訓点がつけられたこと、万葉集注釈を書いたことの三点はそれまでの万葉研究を大きく転回せしめたものである。そうして方法論として道理と文証とを説き、これを実践したことはすでに近世の文献学的方法を自覚していたことを示している。この道理と文証とについてすこしく考えて見たいのであるが、その前に万葉研究史というだけでなく、古典文学研究史に於ける仙覚がいわゆる学問の伝統の上でどういう関係にたつかを考えて見たい。

仙覚の伝記については明治の末から佐佐木信綱博士が種々探求されていたが、その全貌がなか／＼つかめない。仙覚奏覧状の出現によって明らかにした点もあるが、奏覧状を疑う意見もあった。しかし後に古写本の奏覧状が出てその前半であったが、複製もされ信頼すべきことになった。これによると仙覚が百五十二首の新点を加えたのは寛元四年七月十四日に百五十二首の新点を加えたことがわかる。四十四才の事になる。寛元五年仙覚は寛元の治定本に校点了又重校了とあり、

権律師生年四十五

とあるから寛元四年は四十四に当るのである。奏覧状には

建長五年十二月 日慈覚門人權律師仙覚上

とある。

それにしても仙覚という人物は闇につまれている。万葉集抄に「愚老をとらへくだれるすゑの代にあたりてあづ

まのみちのはてに生れ来れる身なれば云々」とあるから、恐らく常陸の国に生れ十三歳の時、万葉集の東歌をよんで心ひかれて万葉集研究に入ったことは推測されている所である。しかし寛元三年四十三歳の頃には鎌倉の比企ヶ谷新釈迦堂僧坊で万葉集校訂に従い、將軍頼経から万葉本に披閱の便を与えられている。それはどのような経路を通じてなされたであろうか、仙覚は常陸から鎌倉に出て来てそこで万葉研究を行ったというだけではないであろう。鎌倉では仙覚があれだけの万葉研究をなし得る基礎が築かれようとは思われない。十三の年から四十三才まで三十年の間どのように過したであろうか。私はどういふ機縁を得てか京都か奈良で修行したのではないかと思う。これを裏づけるのはかつて佐佐木信綱博士が和歌史の研究に書かれた「二人仙覚」の項で紹介されている点である。それは和田英松博士が大和の当麻寺の曼陀羅を見られた時に仁治三年に厨子の扉を修理した際の修理勤縁衆の中に権律師仙覚という名を発見されたことを挙げてゐる。当麻寺は二上山の麓にある寺で真言浄土両宗にわたっている仁治三年(一二四三)は仙覚が四十歳に当る。年代的に見ても仙覚として矛盾はない。佐佐木博士の報告してられる今一人の仙覚は醍醐三宝院に仙覚日記というがあるが、それは別人であることがわかったとされているが、当麻寺の方の仙覚は「万葉集の仙覚らしく思はれる」とされている。たゞそれ以上追究してはいられないが、私もこの当麻寺の仙覚は万葉研究家の仙覚と見たいと思う。年代も矛盾しない。仙覚が京都や大和へ来たのは何時かわからないが早く出家して京都の寺へ来て学問僧として悉曇等も学び少年の時から愛した万葉研究の素地としたのであろう。そうして四十歳の頃までは京大和にとゞまって仏道修行をし権律師となり万葉にも深い造詣を得てから鎌倉の寺へ来たのではなからうか、それにして四十歳を過ぎて鎌倉に参るまでの仙覚がこの当麻寺の記録などをたよりにもうすこし明らかにならないものかと思いつゝ未だにそれを果していない。

四十三歳以後の仙覚は万葉集の奥書などによっていくらかわかるし、万葉集注釈を書いたのは奥書によると

文永六年孟夏二日於武蔵国比企郡北方麻師宇郷政所註之了権律師仙覚

とあつて比企郡麻師宇郷で書了つてゐる。文永六年は六十歳になる。仙覚の経歴は文永十年七十一歳以後のことは見えない。その頃世を去つたのであろうか。

仙覚は万葉集をどのように考えていたか、奏覧状によると

万葉集矣或其情幽々画ニ商量兮累日一或其詞玄々斲ニ時習兮涉月一
とあり、また

和歌者我國之風俗万葉集又和歌源也此道好事尤可明知之

ともある。万葉集の情を幽々、詞玄々といっているのは万葉集は幽玄であるとしているようである。これは僧侶として仏教的見地から万葉集を解したと見られる。

それよりも注目されるのは方法の上で道理と文証をとっていることである。万葉集抄で万葉集の撰者をとくに従来の諸説をあげた後に

今檢云、此集、為_三聖武之撰事、無疑、有道理有文証

として、三の道理と三の文証とを挙げている。この場合、道理というのは万葉集の内容を吟味して、その上から推定したことをさし、文証とは文献的証拠をさしているようである。

たとえば、道理として神龜年中の歌と天平二十年の間の歌が多いのは第一の道理であらうとした如き、また文証として文武天皇の御事を大行天皇と申上げた点その他をあげているなども注意される。

この場合仙覚が道理と文証とを挙げたのは何人かの説によったかと考えたが、この二を合せて挙げたのは外に見つからない。道理というのは、「其行道理也勇」（荀子）「洪愈頗聰明識道理」などある。筋道にかなったことをいう、日本でも

さすがに道理失ひ給はず、さかしくおはする人なれば（宇河保物語、嵯峨院の君）

此の御事にふれたることをばだうりをも失はせ給ひ（源氏物語、桐壺）

など見えるが、中世では、殊に道理は重んじられ慈鎮の愚管抄では歴史の根本を道理におき

としにそへ日にそへては物の道理をのみ思いつづけて老のねざめをも慰めつゝ……昔よりうつりまかる道理もあはれに覚えて

とある。「物の道理をたへるやうは是が誠の道理にて侍るなり。」と言っている。仏法王法を道理として説いている。無住の沙石集も親房の神皇正統記もこの道理をとき、それを歴史の根本にすえている。仙覚も恐らく天台の権律師と

して慈鎮の道理論などの影響をうけていると見られる。

一方に文証を重んずることは仏典の方法から得たとと言えるし、万葉研究の上から言えば顕昭の方法などから得たのではないかと思われる。六百番歌合の判に、俊成が春日ということをきくなれない語として非難したのに対し、顕昭が陳状で直ちに万葉から

うら／＼と照れる春日に雲雀あかり情悲しもひとりし思へは

の歌をあげて応えているが、顕昭の文証のたしかな点は契沖も代所記でこれを推証しているが、仙覚も顕昭の文献を重んずる方法を学んだと見られなくもない。

そうして道理と文証とを別々に重んじた意見は他にも見られるが、道理と文証とを併せて方法論の根本にすえたのは仙覚がはじめではなからうか、仙覚は道理と文証とを見事に実践して万葉研究に大きな成果をあげているのである。私は方法論とその実践としては近世の契沖の文献学的方法を仙覚はすでにとき、実践していると思うのである。契沖の方法は僧侶として仏学から来ていると思うが、それは儀軌の校合などによってもそれが知られるが、万葉研究の伝統から言えば、顕昭と仙覚とに負う所が多いと思う。

仙覚の学統を伝える由阿も中世の万葉研究史上重要であるが、今年五月中世文学会の人々と由阿のいた藤沢の遊行寺に参った折り、その寺に伝わる過去帳を見るを得た。これは時衆史料第一（昭和三十九年六月刊）に時衆過去帳として大橋俊雄氏の編著として刊行されている。それによって調べるとその中に由阿弥陀仏の名も二所に見えている。嘉元元年九月十二日の条に、由阿弥陀仏とあり更に永享五年以後と思われる所にも「由阿弥陀仏」とある。嘉元元年に、世を去った由阿は別人であろうが、後の由阿弥陀仏は二条良基に講義をした由阿であろうが、それ以上のことはわからない。由阿の万葉研究は仙覚の弟子の玄覚の影響かとも思われ、その実証的な学風は仙覚の文証を重んずる学風をうけている。たゞ由阿には仙覚の道理をどこまでうけついでいるかは由阿の詞林采葉抄や青葉丹花抄、拾遺采葉抄等の著書からは、はっきり見られない。

契沖の万葉研究史上の実績と位置についてはすでに度々述べたのでこゝに繰返さないが、万葉代匠記（初稿本と精撰本とを含めて）の古典研究史上の価値と位置とは画期的であり、代匠記を境として注釈を旧注と新注とにわかつのである。また万葉集を主なる文献としてそこから歴史的仮名遣の事実を認め、その実例を集めて和字正濫鈔を書いたことは、万葉研究を基礎とした国語研究上の画期的成果であるが、万葉集の文学的研究の成果としてもその歌風史的な創見をあげたい。この点をこゝでは述べたい。

日本の歌の批評の上で万葉集と古今集と新古今集の三歌集を歌風史的に批評するのは、近世以来、常識的になつてゐるが、これははじめて行つたのは誰れであらうかということから考へてゐるのであるが、私の現在まで知り得た所では契沖がはじめてではないかと思つてゐる。万葉集だけの批評、古今集だけの批評は契沖以前にも多くある。俊成の古来風体抄にも万葉歌風論、古今歌風論は見えるし、為兼の為兼卿和歌抄にも万葉歌風を説いてゐる。為兼が「万葉の歌は憂晴の区別もなく歌ことばと日常の詞との区別もなく思うまゝによんでゐる」と言つたのも、万葉歌風論と言つてよい。それから万葉と古今との比較は自ら明細されないではないが、新古今をも加へ、この三歌集の歌風を比較したのは、契沖の万葉代所記に見えるのがはじめてではないかと思つてゐる。

万葉集 一、高く大きなり 二、なりは奇怪ならず。三、心をいれず

古今集 一、高く大きなり 二、なりはヤ、面白し 三、心あるさまにつくる

後の集 二、なりをいかで作出てしがなと巧む 三、心を附て景趣大からむとする

という三歌風の比較はそれである。後の集とあるが、これは新古今集をさしてゐることは、別のところで古今と新古今の歌風とを比較して

ある人古今の恋のうたはあはれに、新古今の恋のよきはおもしろしと申き、よめるとつくれるとによれり（河社）とあるによつて明らかである。一方を「あはれ」、一方を「おもしろし」と言い、一方をよめる歌、一方をつくれる歌と評してゐるのを、前の三歌集の比較と併せて見ると、後の集は新古今をさすことは言うまでもない。このように

三歌集の歌風を比較して説いただけでも契沖の歌論家としての位置は大きいのである。

四

つぎに、木村正辞が近代に於ける万葉研究の先駆として占める位置は大きい。雅澄の万葉研究が近世の万葉研究の最後をかざるものであるとすれば、木村博士の万葉集研究は近代の万葉研究の出發をなすものである。私は校本万葉集の編纂の一部を分担した時東洋文庫に収められている木村博士の著書の稿本を調べたが、この六月に、全国大学国語文学会の研究発表会の時、木村博士の稿本などの展観をゆるされてその著書を再び見る機会を得てその万葉研究のすぐれた成果と位置とを改めて確認した。

木村博士は美夫君志に添えられた小伝によると、文政十年四月六日下総国埴生郡成田町に生れ、伊能穎則に国学を学び、ついで岡本保孝の門に入り和漢学、音韻学を修めた。明治二年史料編修、大学、大助教に任ぜられ、更に文科大学教授、高等師範学校教授に任ぜられた。二十三年東京学士院会員に挙げられ、二十六年官を辞し、三十四年文学博士、三十五年国語調査委員会委員に任ぜられている。

その著書には万葉集美夫君志卷一、二、万葉集書目提要、万葉集文学弁証、万葉集字音弁証、万葉集訓義弁証の外に櫛斎雜考、三弁証補遺、刻本万葉集復旧、万葉集略解補正、万葉集古義存疑などある。稿本では美夫君志は初稿、再稿があり、はじめに万葉集講義とある。「万葉集講義録講述」とあるのから次第に整えられ美夫君志と名づけられたのである。字音弁証や訓義弁証も初稿本と再稿とあり、たび／＼書き改められていったことがわかる。

木村博士は近世と近代との境にたつこと、俊成が古代と中世との境にあると同様である。それだけ近世的な所もあるが、全体として近代の出發をなしていると言つてよい。万葉集書目提要の如き、万葉集の写本刊本や注辞書その他のわかつた限りの書の書目を作り、その解説を加えた著書をなしたことだけでも古典研究に於ける科学的処理の方法がわかり、近代の出發を語るものと言える。また文字、字音、訓義の三弁証をまとめ、その補遺をも著しているのを見て、岡本保存の音韻学に学んだものを基礎としているが、木村博士の近代の万葉集の科学的研究の先駆としての意義を認めたいのである。近代国文学の出發として私は小中村清短博士と木村正辞博士との学門を高く評価したので

あるが、小中村博士は文学史研究の先駆をなすに對して木村博士は万葉集という一古典に集中してすぐれた成果をあげた二人の先覺と言つてよいと思ふ。

万葉集訓義弁証（再稿）には安政二年序があるが、その中に大夫は「丈夫」の誤とある説あれど、「大夫といふも丈夫とあるも、ともに誤ならず」とある。また三弁証補遺には「玉垣入風所見去子故」に「タマカキノホノカニミエテイニシコユエニ」の訓があり、更に「タマカキノスキマニ」にも訓じ、「垣入はカキイリなるを、イの言は自ら省きても云べし、また入をりの仮字としたることもあり」と述べている。更に再按として、

余が万葉集説叢に土佐人鹿持雅澄の説を出し、おのれの補考をも加へおきたり。それに従ふべし。此は玉の字解わかるかりき。玉垣入の条に至りて玉の字の説にいよく窮せりともある。木村博士の解釈態度を見る上にも注目される例である。

木村博士が近代万葉集の学問的研究の先驅的意義は大きいと言わねばならない。

このようにして私は万葉研究史上に仙覺、契沖、木村正辭の三人を挙げて、その意義の一端にふれたのである。